

情報生態学的人格発達論の試み：認識論へ向けて

Information Ecology Perspective of Personality Development: Everyday Life Epistemology

高橋 秀明

Hideaki Takahashi

放送大学

Open University of Japan

hide@ouj.ac.jp

Abstract

本論では、情報化社会における人間の発達を捉える枠組みとして、情報生態学的人格論を提案した。

Keywords

Information Ecology, Personality Development, Everyday Life

1. はじめに

現代は情報化社会であると言われて久しいが、その影響は人間の日常生活に隅々まで及んでいる。人間発達はその日常生活の営みの中で進展していくので、進化し続けている情報化社会の中で捉え直し続けていくことが求められていると言えよう。

本論は、このような背景の中で、人間発達を捉え直すための一つの試みである。高橋[11][13]は、放送大学オンライン授業や同大学院「研究指導」という事例を解釈するための枠組みとして、コンテンツ、メディア、受信者の関係の中で人間の活動とその発達を捉える森[3]の論考を参考にしつつも、情報生態学的人格発達論の観点を提案したが、本研究はこの観点をさらに精緻化する試みであると言える。

2. 日常生活を捉える枠組み：概念モデル

情報化社会とはさまざまなデジタルメディアで取り囲まれた、つまり情報やデジタルメディアを環境として捉えることができる社会である。また、デジタルメディアが人間にとって身近になり、人間の身体の一部になっていると捉えることもできる。

情報生態学の枠組み自体は、高橋[6][7][10]による。高橋[6]は、高橋・山本[15]による「メディア心理学」を理論的に発展させたものであるが、メディアと人間の認識活動との関係を検討する際は、メディアの「媒介・媒質」「道具」「形式・様式」「意味内容・コンテンツ」という4つの側面を区別することが必要であるとしている。高橋(2007)は「説明」を事例にして、このメディアの4側面について詳細に述べるとともに、人

間にとっての「説明」という心理的活動の意味を再検討している。

日常生活には、「日々の諸々の活動」という意味と「人生で経験する出来事(ライフイベント)」という二つの意味がある(大久保[4])。大久保[5]は、2011年3月の東日本大震災を経て、「<私>の生活に変化をもたらした出来事(要因)」を「突発的・趨勢的」と「社会的(マクロ)・個人的(ミクロ)」との2次元で整理して、「突発的・社会的出来事」として「震災」を、「突発的・個人的出来事」として「身近な他者の死」を、「趨勢的・社会的出来事」として「高齢化」や「長期的な不況」を、「趨勢的・個人的出来事」として「加齢」を取り上げている。

しかし、この「突発的・趨勢的」という次元については、東日本大震災という出来事による感傷的な概念と言わざるを得ない。すなわち、科学技術の発展はその歩みを止めることはないので、「突発的な出来事」について想定することができるばかりか、民主的な国家の人間であれば「趨勢的な出来事」についても国民の望む方向に変えることができるからである。つまり、人間が全く制御できない出来事を想定することは困難であるということである。

日常生活の二つの側面である「日々の諸々の活動」も「人生で経験する出来事(ライフイベント)」も、現代の情報化社会においては、情報通信技術を利用した道具やサービスと密接な関連を持っていると言える。高橋[8][9][14]は「ライフログ収集ツール」の使いやすさを評価しているが、その中で「プロセス制御行動としての日常生活の営み」という考え方を提示している。この考え方は、人間は情報通信技術を利用しながら日常生活での営みを制御していくということである。

高橋[12]は、青木・高橋[1]による「日常生活におけるデジタルメディア」科目全体の枠組みとして、日常生活におけるデジタルメディアの利活用について概念

モデルを示している（図 1）。この概念モデルは、「日常生活の場面」と「デジタルメディアで実現される機能」と「デジタルメディアの在り様」という 3 つの次元を想定している。

能」と「デジタルメディアの在り様」という 3 つの次元を想定している。

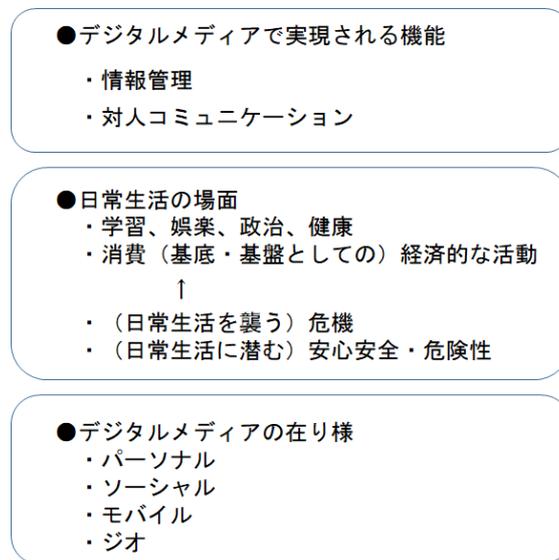


図 1 デジタルメディア利活用：概念モデル

日常生活の場面とは、日常生活の具体的な内容のことである。多くの「生活時間調査」では日常生活において人間が取る行動が分類されている。高橋[12]は、青木・高橋[1]が扱っている場面として「学習」「娯楽」「政治」「健康」を、また経済的な活動であり日常生活の基底・基盤として「消費」を、さらには、日常生活を襲う「危機」、日常生活に潜む「危険性」、逆に言う日常生活の「安全・安心」を上げている。

デジタルメディアで実現される機能としては、「情報管理」と「対人コミュニケーション」とがある。情報管理とは、情報の産出、検索、記録やデータベースの利用などである。人間にとっては、情報とは言語情報ばかりでなく、非言語情報も有意味である。対人コミュニケーションとは基本的には他人とのコミュニケーション、やり取りをすることである。情報のやり取りという意味では、やり取りの相手は他人つまり人間に限定する必要は無いとも言える。そしてコミュニケーションの実際を情報として記録に残すことも同時に行われるので、情報管理と（対人）コミュニケーションとは表裏一体の関係として捉えることが自然であろう。

デジタルメディアの在り様とは、「パーソナル」「ソーシャル」「モバイル」「ジオ」の 4 つのメディアの在り様を区別できることを示している。パーソナルメディアとは人間一人一人の利用の在り方という側面であ

る。ソーシャルメディアとは複数の人間による利用の在り方という側面である。モバイルメディアとは人間が移動しながら利用するという側面である。ジオメディアとは人間が利用する場所に埋め込まれたメディアという側面である。

以上の 4 つの在り様は、人間存在の在り方とも密接に関連している（図 2）。まず、パーソナルメディアは人間一人一人の利用の在り方という側面であるので、「私」という存在と関連している。私という存在の「同定」という問題から始まり、「自己のメディア化」や「匿名」という問題まで「私」という存在と関連しており、「私」の概念自体を再検討することが必要であろう。次のソーシャルメディアであるが、「私」は他人である複数の「私」と共に存在しており、いわば「私たち」として存在しており、ソーシャルメディアは「私たち」という存在と関連している。すなわち「社会」という存在と関連しているということもできる。

モバイルメディアは人間が移動しながら利用する側面であるので、「私」そして「私たち」という存在が移動しているということである。ジオメディアとは人間が利用する場所に埋め込まれたメディアという側面であるので、「私」そして「私たち」という存在は（移動しながら）ある一定の場所を占めているということである。このことは自明のことであるというよりも、「私」そして「私たち」という概念、さらには「社会」とい

う概念に、ある場所を占める、そして移動する、動き回る「私」そして「私たち」という性質を含めて再検討する必要があるということであろう。

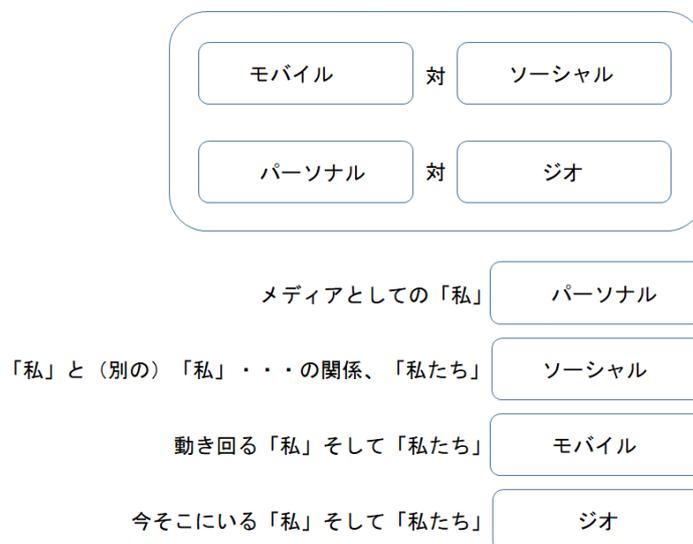


図2 4つのメディアの在り様

3. 日常生活を記述する枠組み：研究方法論

前節では、概念モデルであるが、日常生活を捉える枠組みを示した。本節では、日常生活を研究するための方法論を述べるが、特別の方法論がある訳ではない。たとえば、黒須・高橋[2]による「ユーザ調査法」は情報通信機器やサービスの利用者（ユーザ）を調査する方法を概説しているが、日常生活を研究するための方法論としても捉えることができる。

ここでは、「認知過程」を「知覚的・行動的時空間」「個人的・生活的時空間」「社会的・歴史的時空間」という3つの時空間の水準で捉えることが必要であるとした高橋[10]の考え方を、本論の内容に沿って紹介しよう。

第1の知覚的・行動的時空間とは、個人が今ここで経験している時空間のことである。基本的には個人が生得的に持っている器官を使って処理できる時空間の水準であり、心理学での「認知過程」として通常捉えられるものである。「衣食住」に関わる「認知過程」も含まれると言える。さまざまなデジタルメディアを介して、さまざまな情報を管理しコミュニケーションを実行していくが、その過程で行われている認知過程である。

第2の個人的・生活史的時空間も個人の認識に関わるが、個人の人生において、特定の時期・期間に特定の場所・地域によって捉えることのできる時空間のことである。日常生活では、入学、卒業、就職、結婚、

出産、退職などのライフイベントや、いわゆる「冠婚葬祭」と言われる出来事に関わる「認知過程」である。

第3の社会的・歴史的時空間は、時計や暦という時間を区切るしかけと、地方や国家という空間を区切るしかけとによって位置づけられた時空間のことである。法律や慣習によって支えられている各種の事業やメディアイベントはこの水準の時空間に関することと言える。

第2や第3の水準の時空間になると、想定される時空間が長く大きくなるので、そこでの認知過程を捉えることは困難になるが、第1の水準よりも粒度・精度は低くなるが、認知過程を対象としていることは事実である。

人間の人格発達とは、第2の水準での変化として捉えるのが分かりやすいであろう。しかし、第1の水準でのミクロな認知過程、つまり各種の情報機器やツールが介在され認知過程の積み重ねによって、本人の意識とは独立に変化していく面も無視できないであろう。また、人格の国民性や文化差という問題もあり、第3の水準での人格発達という側面も無視できないであろう。

4. 日常生活を営む認識論

人間の発達や日常生活の営みの中で実現されている。研究という活動も日常生活の営みの中で実現されている。人間は日常生活の営みの中で、自らの認識論を形

成していく。

情報化社会では、情報通信技術の発展に伴い、人間が自己の生活を情報管理することを容易にするサービスやツールが増えたことは事実であろう。そして、情報管理においても、自己を表現したり、自己を振り返ることが、文字通り日常茶飯事として行うことができてきていることも事実であろう。

上で、高橋[8][9][14]による「プロセス制御行動としての日常生活の営み」という考え方について述べたが、複数のライフログ収集ツールの長期間の同期利用における使いやすさを評価する活動に基づいており、ライフログ収集ツールという道具については、「暴力性」「権力性」「自己制御性」「超個人性」という特徴を明らかにした。これらの性質は、ライフログ収集ツールという道具であるのでその性質が先鋭化したと言えるが、人間が作ってきた物理的道具（人工物）一般に備わった性質であり、さらには言語を始めとする「心理的道具」(Vygotsky[16])にも認めることができる性質であると言えよう。

人間の情報通信技術を介した認知過程は最初は、第1の知覚的・行動的時空間の水準で実践されているが、そのような実践が情報として蓄積され続けていることも事実である。そして、そのような蓄積された情報を利用した別のツールやサービスも増えてきていることも事実であろう。こうして、第2の個人的・生活的時空間の水準や第3の社会的・歴史的時空間の水準での認知過程も日々実践され、そのような実践が情報として蓄積され続けてきている、というように認知過程が入れ子状に繰り返されているということであろう。

5. おわりに

情報化社会とは日常生活ばかりでなく、研究活動にも影響を与えるものであろう。情報通信技術は生活者にも利活用され、研究者にも利活用される。人間の営みは、このように科学技術の営みと同期して、影響を与え合いながら進展してきたということである。人間発達は、そのような人間の営みとして捉えることができるだろう。

本論で述べてきた情報生態学的人格発達論は、高橋[11][13]が、放送大学オンライン授業や同大大学院「研究指導」という事例を解釈するための枠組みとして提案してきたが、適用範囲は、(生涯)学習に限定されないことは、本論で示すことができたであろう。

参考文献

- [1] 青木久美子・高橋秀明 2018 改訂版 日常生活のデジタルメディア 放送大学教育振興会
- [2] 黒須正明・高橋秀明(編) 2016 ユーザ調査法 放送大学教育振興会
- [3] 森津太子 2003 メディア研究を人間発達の視点から考える 坂元章(編) メディアと人間の発達 学文社 Pp.226-239.
- [4] 大久保孝治 1994 生活学入門 放送大学教育振興会
- [5] 大久保孝治 2013 日常生活の探求 ライフスタイルの社会学 左右社
- [6] 高橋秀明 2006 マスメディア、マルチメディアって何だろう? —メディアの認知心理学—、太田信夫(編) 記憶の心理学と現代社会 有斐閣 Pp.81-90.
- [7] 高橋秀明 2007 説明表現とメディア 比留間太白・山本博樹(編) 説明の心理学 ナカニシヤ出版 Pp.94-109.
- [8] 高橋秀明 2014 ライフログ収集ツールの使いやすさ：長期間の利用から 日本認知心理学会第12回大会発表論文集
- [9] 高橋秀明 2015a ライフログ収集ツールの使いやすさ：複数ツールの同期長期利用 日本認知心理学会第13回大会発表論文集
- [10] 高橋秀明 2015b 知識という記憶、文化と認知過程 原田悦子(編) スタンダード認知心理学 サイエンス社 Pp.121-140.
- [11] 高橋秀明 2017 情報生態学的人格発達論の試み：放送大学オンライン授業を事例にして 日本発達心理学会第28回大会発表論文集
- [12] 高橋秀明 2018a 放送教材「日常生活のデジタルメディア(18)」台本・パターン 放送大学
- [13] 高橋秀明 2018b 情報生態学的人格発達論の試み：放送大学大学院「研究指導」を事例にして 日本教育心理学会第60回総会発表論文集
- [14] 高橋秀明 2018c ライフログ収集ツールの使いやすさ：その超個人的性質 日本認知心理学会第16回大会発表論文集
- [15] 高橋秀明・山本博樹(編) 2002 メディア心理学入門 学文社
- [16] Vygotsky, L. S. 1979 The instrumental method in psychology. In J. V. Wertsch (Trans. & Ed.), The concept of activity in Soviet psychology. M. E. Sharpe. Pp.134-143.

謝辞

本研究の一部は、平成29年度放送大学学長裁量経費ならびに平成29年度放送大学教育振興会の助成を得て実施したものである。